

日蓮大聖人御書全集

ほっけししょうみしょうしろう

法華証明抄

新版
1930
ゝ
1931

ほつけしようみようしよう

法華証明抄

こうあん

ねん

弘安5年('82)

がつ

にち

2月28日

さい

なんじようときみつ

61歳

南条時光

ほけきよう

ぎようじゃにちれん

かおう

法華經の行者日蓮

花押

まつだいあくせ

ほけきよう

きよう

しん

そうろうもの

末代悪世に法華經を経のごとく信じまいらせ候者を

ほけきよう

おんかがみ

浮

たも

はいけん

ば、法華經の御鏡にはいかんがうかべさせ給うと拝見つか

そうら

かこ

じゅうまんおく

ほとけ

くよう

ひと

まつり候えば、過去に十萬億の仏を供養せる人なりと、

しやかぶつ

こんく

おんくち

い

たま

そうろう

たしかに釈迦仏の金口の御口より出でさせ給いて候を、

いちぶつ

まつだい

ぼんぷ

疑

一仏なれば末代の凡夫はうたがいやせんずらんとて、ここ

とうほう

遙

くに

過

たま

ほうじよう

より東方にはるかかの国をすぎさせ給いておわします宝浄

せかい たほうぶつ

ぎょうこう

たま

しゃかぶつ

世界の多宝仏、わざわざと行幸ならせ給いて、釈迦仏にお

む

り向かいまいらせて、「妙法華経は、皆これ真実なり」と

しょうみよう

たま そちら

うえ

何

ふしん

のこ

証明せさせ給い候いき。この上はなにの不審が残るべき

まつだい

ぼんぷ

覚

束

思

なれども、なおなお末代の凡夫はおぼつかなしとおぼしめ

じつぼう

しょうぶつ

め

集

たま

こうちよう

しやありけん、十方の諸仏を召しあつめさせ給いて、広長

ぜっそう

もう

むりようこう

なが

虚

言

広

舌相と申して、無量劫よりこのかた永くそらごとなきひろ

長

おお

おんした

しゅみせん

こくう

た

並

くながく大いなる御舌を、須弥山のごとく虚空に立てなら

たま

夥

そちら

べ給いしことは、おびただしかりしことなり。こう候えば、

まつだい

ぼんぷ

み

ほけきよう

いちじにじ

しん

末代の凡夫の身として、法華経の一字二字を信じまいらせ

候えそうらば、十方じつぽうの仏ほとけの御舌おんしたを持つものぞかし。たも

いかなる過去かこの宿習しゆくじゆうにてかかる身みとは生うまるらんと

悦よろこびまいらせ候上そうろううえ、經文きやうもんは、過去かこに十萬億じゆうまんおくの仏ほとけにあい

まいらせて供養くようをなしまいらせて候そうらいける者ものが、法華經ほけきやうば

かりをば用もちいまいらせず候そうらいけれども、仏ほとけくようの功德くどく

莫大ばくだいなりければ、謗法ほうぼうの罪つみによつて貧賤ひんせんの身みとは生まれうて

候えそうらども、またこの經きやうを信しんずる人ひととなれりと見みえて候そうらう。

これをば、天台てんだいの御釈おんしゃくに云いわく「人ひとの地ちに倒たおれて、還かえつて

地ちより起おくるがごとし」等とう云々うんぬん。地ちにたおれたる人ひとは、か

えりて地よりおく。ち 起法華經謗法の人は、三悪ならびに人天の

ち 倒地にはたおれ候えども、かえりて法華經の御手にかかりて

ほとけ 成仏になるとことわられて候。そうら

う えののしちろうじろうしかるに、この上野七郎次郎は、末代の凡夫、武士の家に

う あくにん生まれて悪人とは申すべけれども、心は善人なり。その故

にちれん ほうもんは、日蓮が法門をば上一人より下万民まで信じ給わざる上、

しん ひとたまたま信ずる人あれば、あるいは所領、あるいは田畠等

う えにわずらいをなし、結句は命に及ぶ人々もあり、信じがた

母 こうえのしんき上、はは・故上野信じまいらせ候いぬ。

う えき上、はは・故上野信じまいらせ候いぬ。

ものちやくし

ひと

勧

しんちゆう

しん

またこの者嫡子となりて、人もすすめぬに心中より信じ

じようげばんにん

諫

脅

まいらせて、上下万人にあるいはいさめ、あるいはおどし

そうち

す

こころ

そうち

ほとけ

候いつるに、ついに捨つる心なくて候えば、すでに仏に

成

み

そうち

てんま

げどう

やまい

付

脅

なるべしと見え候えば、天魔・外道が病をつけておどさ

こころ

そうち

いのち

限

んと心み候か。命はかぎりあることなり。すこしも

驚

おどろくことなかれ。

きじん 奴

ひと

悩

つるぎ

逆

また鬼神めらめ、この人をなやますは、剣をさかさまに

呑

たいか

抱

さんぜじつぼう

ほとけ

だいおんてき

のむか、また大火をいだくか、三世十方の仏の大怨敵とな

ひと

病

るか。あなかしこ、あなかしこ。この人のやまいをたちま

治

守

きどう

だいく

抜

ちになおして、かえりてまぼりとなりて、鬼道の大苦をぬく

ぎ

げんざい

こうべしちぶん

わ

とが

べきか。その義なくして、現在には「頭七分に破る」の科

おこな

ごしよう

だいむけんじごく

お

なが

に行われ、後生には大無間地獄に墮つべきか。永くとどめ

なが

止

にちれん

ことば

卑

こうかい

よ、永くとどめよ。日蓮が言をいやしみて、後悔あるべし、

こうかい

後悔あるべし。

こうあんごねんにがつにじゅうはちにち

弘安五年二月二十八日

ほうきぼう くだ

伯耆房に下す。